



# 暑中御見舞申し上げます

平成二十三年 盛夏

オヤ夏あ

“過ぎし夏の思ひ”から

昔の思い出は夏の事が多い。ここ北海道は函館にきて二度目の夏である。

今年春先、東日本を襲った地震による大津波と原発の災害とが加わり、一瞬にして見渡す限り瓦礫の地と化し、未だ多くの人が行へ方知れず、被害の甚大さに加えて、その復興のメドも見えず、唯々空しく月日が過ぎ去っていく昨今である。

一方今から六十数年前には、この悲劇を更に拡大した現実を、当時の日本国民すべてが体験又は耳目にしてるのである。

それは今回のような半ば自然災害とは違って、米軍による空からの無差別爆撃や、広島長崎に於ける原爆の被弾と言う、極め付けの人的災害によるものであった。

それが昭和天皇のご聖断により終止符を打ったも、この夏の暑い日であった。

改めての確認にと、70年前に日本は“アメリカと戦争を始めた”と言うと、今どきの若者たちは“エエッ！”と言って驚くようである。

ある女子大学の教室では学生の半数は“本当に知らない”と答えている、とその学校の先生は言っている。

そして“どっちが勝ったの”と聞くから“それはアメリカさ”と言うと再び“ウソー”

これはまさしく言葉どおりの嘘で、本当は日本が勝ったのである。

しかも圧倒的に大勝したのである。

天才軍事学者クラウゼヴィッツはその著書『戦争論』の中で“戦争とは国家が行う政治の延長で、最後の外交交渉である”と言っている。

外交手段である以上は目的がある。

日本が始めた大東亜戦争には、次に挙げる2つの主な目的があった。

その1. A B C D（米国・英國・支那・オランダ）ラインによって経済封鎖され、その上にハル・ノートと言われる無理難題を突き付けられた日本は、自ら活路を求めての資源調達に南方へと進出した。

即ち「経済問題の解決」に戦争と言う武力の行使。

その2. 当時アジアに於ける諸民族は、日本とタイ以外は、全て欧米先進国の属国植民地であった。

これを彼らの手から解放し、八紘一宇・五族協和（大和民族、朝鮮族、漢族、満州族、蒙古族）の「大東亜共栄圏構想」の実現を図る。

要するに我が国に無い石油資源を求めた「経済問題」と、植民地解放と言う「民族問題」での戦いであった。

『戦勝国』とは、戦争目的を達成した国の事を言う。

今から66年前の夏、日本は人類最初の原子爆弾とやらに見舞われ、死んだ振りをしたのである。

これに騙された欧米先進国は次々と植民地を解放した。（ただ現中国の北京漢民族は、未だ周辺民族を自治区として囲い、解放してはいない）

特にアメリカは飢えに苦しんでいた当時の日本に、食料の援助や、技術の供与、経済の復興等々に多大な力を注いだのである。

その結果が今日の繁栄日本に繋がってきてている。

少なくとも終戦から数えて50年ぐらい迄の日本では、さきの二つの「戦争目的」は見事に実現しているではないか。

故に各地海洋上の「戦闘でこそは敗れたが、戦争には勝った」と言う論法である。

### 【閑話休題】

ここ百余年間における国家数は以下のように変化している。

◇十九世紀末	37か国
◇第二次世界大戦(大東亜戦争)中	66か国
◇現在の国連加盟国数(2008年)	195か国

そこで日本が戦争に駆り立てられていった原因の一つ、即ち聯合国側の対日石油輸出禁止という経済制裁を考えると、現在の私たち（米国・EU・韓国・日本の事）は、いま隣の国北朝鮮に対してこれと同じ事をしているではないか。

この隣国が70年前の日本のように、追い詰められ戦争を仕掛けてくるかも知れない。現に韓国は幾度も奇襲攻撃を受け、我が国にも長年に亘って邦人拉致と言う隠密作戦が行われており、その実態や結末は未だ霧の中である。

戦争の悲惨さ、悲劇の実体験からそれを忌み嫌い“二度と戦争はごめん”と言う日本人の決意は全く正しい。

しかしそれなら、その戦争が『なぜ、どうして起こるのか？』と言う要因解明をも徹底すべきであるにも拘わらず、それには全く触れず、唯々口を開けば“戦争反対”と言う情念だけに終始し、一方の現実（相手国の実情やその意図等）には、マスコミを始め政府や政治家、多くの日本人にはそれを見定める意志は無く、従ってその対策や警戒心を全く持ち合わせてはいないと見るは言い過ぎか。

“戦争は絶対反対”と“原発は絶対安全”的二つは、奇しくも思考停止の同一根である。

3年前には国民の圧倒的な支持を受け、自民党から政権を引き継いだ民主党、時の鳩山代表は、沖縄の米軍基地の一部を海外又は県外に移し、現地の負担低減と言う耳障りのよい公約をして総理大臣になった。

だがこの問題がこじれたとき、振り返って曰く“学べば学ほど沖縄の米軍基地が日本の抑止力には不可欠であると判った”と。

日本三権の長、最高指揮官の発言とは思えない無認識な実態を晒し、結局この公約は果たせず、総理職の退陣を余儀なくされるに至った。

次いで民主党の代表となった現菅総理大臣も、就任早々“靖国神社には参拝しない”と宣言、更に先の平成11年8月『日の丸・君が代』の国旗国歌法が成立するも、同法には国会で反対票を投じた一人でもある。

長年野党であったが故に、国民国家についての見識、日本の安全保障や外交問題等には、全く無関心無責任なこの指導者たちに、国の権力を委ねなければならない現実、行く末を強く案じられてならないのである。

こんな真夏の夢は早く覚めてほしいと願わずにはいられない。

さて悲惨な災害現実や、政治経済的な混乱は一先ずおくとして、かってのラジオ歌謡『夏の思い出』でも口ずさみ、さわやかな叙情気分に浸り一服の涼としよう。

### 『夏の思い出』（作詞：江間章子 作曲：中嶋韻）

①夏が来れば 思い出す  
遙かな尾瀬 遠い空  
霧の中に 浮かびくる  
やさしい影 野の小径  
水芭蕉の花が 咲いている  
夢見て咲いている 水のはとり  
石楠花色に たそがれる  
遙かな尾瀬 遠い空

②夏が来れば 思い出す  
遙かな尾瀬 野の花よ  
花のなかに そよそよと  
ゆれてゆれる 浮き島よ  
水芭蕉の花が 匂っている  
夢みて匂っている 水のはとり  
まなこつぶれば なつかしい  
遙かな尾瀬 遠い空



今回の東日本で起きた震災で、世界中の耳目が日本を注視している。

我々の先代は過去幾度も瓦礫廃墟跡から、見事に復興を果たした実績を持っている。

今回も被災地の人々は、国の支援未だ不十分な中よく我慢し頑張って頂いている。

萬葉の歌人も詠んだ“海ゆかば水漬く屍山ゆかば草生す屍”の御靈には、心安らかな鎮魂を祈願し、全日本としてもこの難關を見事に克服して止まることであろう。



それにしても函館の夏は凌ぎ易い 東京と比較して